



谷間の斜面に張り付くスラム地区。こうした地域に暮らす人々は、日雇いの建設労働など、定収入のない「インフォーマルセクター」で働く。グアテマラの人口の約6割を占める「貧困層」の一員だ



防災研修会で、意見を出し合う「ベインティクアトロ・デ・ディシエンブレ」地区の住民たち。中央奥の机の上にあるのは、防災の基本姿勢・知識を示す資料本、その右後方に見えるのは、参加者から出された意見が書き込まれた表だ。この会場は、比較的広い家に住む住民に提供してもらった



グアテマラ市。首都圏の人口は約240万といわれ、総人口の2割強がこの町に集中している。貧困層と富裕層は異なる地域に分かれて暮らす

# FIELD SKETCH

## 一人一人が築く 家族の安心、 地域の安全

グアテマラは、地震国であると同時に、1998年の「ミッチ」、2005年の「スタン」など、多くのハリケーンにも襲われてきた。自然災害発生時に最も大きな被害を受けるのはいつも、粗末な家に住み、備えない貧困層の人々だ。そんな中、首都グアテマラ市では、JICAの支援のもと、スラム地区の住民が自らを守る手段を身に付けようと奮闘している。

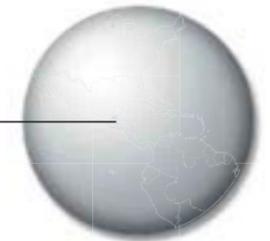
文 = 工藤 律子 (ジャーナリスト)

text by Kudo Ritsuko

写真 = 篠田 有史 (フォトジャーナリスト)

photos by Shinoda Yuji

グアテマラ  
GUATEMALA



この事業には、昨年からグアテマラを含む中米6カ国で実施されている「中米広域防災能力向上プロジェクト：“BOSAI”」のチーフアドバイザー・大井英臣専門家やコミュニティー防災専門の荒木田勝専門家、同プロジェクトと関連プロジェクト全体の調整役・山下巖専門家も協力している。3月には、土砂災害の短期専門家が国家防災調整局に派遣され、各地区で技術アドバイスをを行う。

### 災害は必ず来る、という意識が大切

「日本では、災害は必ず来るという意識を何世代にもわたって広め、防災の重要性を実践的に教えていることが素晴らしいです」  
中米防災センター所属のマリア・エウヘニア・ソトさん(28)が言う。彼女は、2005年にJICAが日本で実施した「中米広域防災研修」(1ヵ月間)に、国家防災調整局のエヘル・ガルシアさん(39)、グアテマラ市役所社会開発部のグスターボ・ピジャルカさん(28)とともに参加した。3人はその成果を、JICAが支援する「グ

アテマラ市8スラム地区・地震災害危機管理のためのローカル能力形成フォーラム「事業」を通して生かそうと試みている。「グアテマラ人は、災害に対する危機感が少ない。人々が防災意識を持ち、自ら考え行動できるよう支援することが、大切なことです」と、グスターボさん。そのために日本を見習い、まずは子どものころから意識を高めてもらおうと、教育省に依頼し、学校行事の一つに「防災デー」を設けてもらった。また、グアテマラ市にある子ども博物館内に、災害体験コーナーも作った。この事業は、自然災害に対して脆弱なスラム地区で、防災教育を行い、地域住民に

よる防災体制を築いて、住民が市役所などと連携し、自らの努力で地域の安全を確保できる環境と文化を形成しようとしている。8地区での実施を予定しているが、周辺地区からの希望が多く、活動は拡大してきた。グアテマラ市では、1996年までは、36年間続いた内戦に



「エスフェルソ」地区の入り口に立つ、危険地域と避難所・ルートを示す図を説明するグアテマラ市役所のグスターボさん。事業は、各地区でこうしたボードを作り、設置することを推進している



市の北東部、第18区にあるスラム地区。ここでは地震や地滑りの危険に加え、汚水の放置やごみの不法投棄、少年ギャング団による犯罪もあり、問題が複雑化している

「壁の補修は、市に相談するべきです」。一人がそう言うと、別の人が「材料提供は頼むにしても、作業は自分たちでやらないと。何でも市がやってくれると思っ込んでいるのは問題です」。どの問題についても、他人任せの発言が出ると、ほかの誰かが自助努力を主張する。そうやって、少しずつ皆の防災に対する主体的な行動意識が養われていく。

最後に再びグロリアさんが、全員で輪になってボールをパスするゲームをして、会をこう締めくくった。

「ゲームでもそうですが、防災においても、皆がコミュニケーションをしっかり取り合っ

て行動することが、成功の秘訣です」

各地区を回り、住民と研修会を企画、実施してきたオスカルさんとグロリアさんは、その難しさを次のように説明する。

「麻薬組織やギャング団が台頭するなど、治安に問題がある地区が多いので、自然災害に限らず、いろんな危険に皆で対処する意識を育てなければなりません。そのために、住民の人間関係にも気を使っています。また、住民の教育水準が低いので、資料や話の内容も、誰もが分かるように工夫をしています」

事業を通して、人々はさまざまな社会問題を克服しながら、自らの力で家族の安心と地域の安全を守ろうと、地道な努力を続けていく。

追記：取材にご協力いただいたグスターゴ・ビジャルカさんは交通事故で昨年11月に逝去されました。心からご冥福をお祈りいたします。

ティクアトロ・デ・デイシエンブレ」で、住民のための防災研修会が開かれた。参加者は約30人。

最初に、研修担当の専門家グロリア・ヤクスさん(41)が、参加者の気持ちをほぐすためのゲームを行い、続いて研修コーディネーターのオスカル・ブランさん(31)が、絵で示された資料を用いて防災の基本姿勢・知識の復習をする。それからいよいよ本番だ。まずはオスカルさんの呼び掛けで、地域に

ある危険な事柄を皆で挙げていく。今夜のような大雨だと倒れそうな木、崩れかけた壁、ごみの不法投棄などなど。

次に、「これらの危険は、私たちにどんな影響をもたらすでしょう? 危険の源は...」と、オスカルさんが、生まれ得る被害、危険の源、自分たちが取れる対策、いつ誰がそれをやるかという実施方法、の順に、住民に問い掛ける。そして、皆が挙げる答えを、前に張った表に書き込んでいく。



事業を担当・推進するスタッフ。右から、グアテマラ市役所社会開発部のグスターゴさんとその上司、中米防災センターのマリア・エウヘニアさん、JICA企画調査員の田中健紀さん、国家防災調整局のエベルさん

「事業を進めるには、市に相談するべきです」。一人がそう言うと、別の人が「材料提供は頼むにしても、作業は自分たちでやらないと。何でも市がやってくれると思っ込んでいるのは問題です」。どの問題についても、他人任せの発言が出ると、ほかの誰かが自助努力を主張する。そうやって、少しずつ皆の防災に対する主体的な行動意識が養われていく。



「サンタ・ルイサ・デ・ロス・ミラグロス」地区のマリア・ラウラさん(右)と娘アウリスさん。防災研修会で得た知識を近隣住民にも広めることが、今の目標だ

町の北側から西の環状線道路に入るとすぐ、とてつもなく深い谷に架かる橋を通過する。橋の左右には、谷間の切り立った斜面に張り付くようにスラム地区が広がる。その一つ、「サンタ・ルイサ・デ・ロス・ミラグロス」は

180世帯が暮らす坂の町だ。「私は76年の地震(全国で2万人以上、この地区で3家族が死亡)も、ハリケーン・ミッチも経験しました。(JICAの)研修会で防災知識を得たおかげで、今は何が起きても落ち着いて行動できるようにになりました」

そう語るマリア・ラウラ・メンドーサさん(45)は、地区ごとで作られた住民組織「コミテ・ウニコ・デ・パリオス(CUB)」のメンバー。CUBの仲間と防災研修会に参加し、協力して、避難所・ルートの表示、崩れやすい道の舗装、土砂崩れ防止の壁建設など、JICA事業を通じての防災プロジェクトを実施してきた。マリア・ラウラさんの娘アウリスさん(12)も、「もう地震が来ても、走らずに落ち着いて避難する、電柱から離れる、といったことが守れるわ」と胸を張る。

事業が行われている地区は大抵、火山性の崩れやすい地盤の斜面に築かれており、大雨が降るだけで地滑りが起き、家屋が倒壊する。不衛生な環境のために、雨が感染症をもたらすことも多い。だから、被害を最小限に抑えるには、物理・精神的備えが重要なのだ。

26世帯が住む地区「エスフェルソ」でも、防災努力が進む。

地区の入り口には、災害発生時の危険地域や避難所・ルートなどを示した図のボードが立てられた。姉とともに防災事業にかかわるベロニカ・ディアスさん(38)は、「ハリケーン・ミッチに襲われた時、近所の女性が一人亡くなり、4人の孤児が生まれました。そういうことが二度と起きないように、防災意識を広めたいんです」と、使命感を持って取り組んでいる。ベロニカさんはこの地区のCUB代表。彼女を含む、女性10人が防災研修会に参加した。スラム地区では、女性のほうが暮らしの安心につながる活動に積極的なのだった。



自然災害に対して脆弱なスラム地区では、住民が行き来する道も急傾斜にあり、細く狭い。危険な上、雨や土砂崩れで容易に通行不能になることが、大きな問題だ

### 女性パワーで「備えあれば憂いなし」

### さまざまな社会問題を乗り越えて

FIELD SKETCH